

Class and the American Dream in The Great Gatsby

小谷, 耕二
九州大学言語文化部

<https://doi.org/10.15017/5472>

出版情報 : 言語文化論究. 10, pp.95-103, 1999-03-01. Institute of Languages and Cultures, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :



『偉大なギャツビー』小考

—階級とアメリカの夢—

小 谷 耕 二

The Great Gatsby は、出版されたのが1925年であり、Fitzgerald 自身時代に密着して書くタイプの作家だったこともあって、ジャズ・エイジと称される20年代と結びつけて考えられる作品である。それはもちろん定石ではあるわけだが、出版の4年後には大恐慌が起これ、その後30年代は文学の領域でも社会主義的な左旋回の傾向が顕著になっていく。フィッツジェラルドはそうした流れに直接関与する作家としてみなされることはあまりなかった。ただ、有閑階級あるいは裕福な階層の人間はよく取りあげているのであって、この作品でも金持ち階級の人間が重要な位置を占めている。そこで、それが社会主義的な発想にかかわるにせよ、かかわらないにせよ、階級という視点から作品を眺めてみるのも無意味ではないであろう。それは作品の構造上 Nick Carraway が彼らをどのように見ているかということと不可分なので、彼の階級意識を軸に階級とアメリカの夢というテーマでいくつか考察を試みてみたい。

I. ニックの階級意識

『偉大なギャツビー』がニックによる一人称の語りの形式を取っており、それが彼が信頼できる語り手であるのかどうかという問題を含めて、さまざまな議論を呼んでいることは周知の通りである。¹ Jay Gatsby の芝居がかった身振りもさることながら、語り手ニック自身の性格や感受性、思考のパターンが、誇張や矮小化をともなって読者を幻惑するギャツビー像を生みだしている。ニックの階級意識もそのままざしに微妙な影を落としている一因として無視できない。

この点については、まずニックがかなり屈折した階級意識の持ち主であることを指摘しておかねばならない。作品の冒頭近く、ニックは自分が Buccleuch 侯爵の血筋につながると言い伝えられている名門の出であることを述べている。その口調には彼特有のシニカルな響きがないとはいえないが、そこに隠された名家意識を見てとることはさして乱暴なことではなかろう。また、West Egg に月80ドルの家賃で借りた住居を“a weather-beaten cardboard bungalow” (9)²と形容したり、そこがひとシーズン1万2千から1万5千ドルする両隣の大きな屋敷の間で「押し潰されそうに (squeezed)」 (11) になっていると言って、あたり一帯と比較して貧弱な住居であることをことさら強調している。さらに、隣のギャツビーの大邸宅にとっては自分の住んでいる家は“eyesore” (11) ではあるが、たいした目障りにもならないとか、たった月80ドルで百万長者の隣に住めて“consoling” (11) だと述べている。しかしこうした斜に構えた、一種卑下したような口吻の一方で、ギャツビーの屋敷

がノルマンディーあたりの市庁舎の模倣であり、家屋の壁の蔦も未成熟であることを見てとって(11)、³ その伝統のなさをそれとなくほのめかしてもいる。名家意識と表裏一体となった、お金のあるなしについてのニックの屈折した意識をここに垣間みることができる。

こうした意識ゆえに、ニックは周囲の人間関係のなかに潜む力関係にきわめて敏感になっている。第二章で彼は Daisy の夫 Tom Buchanan に、その愛人 Myrtle のアパートに連れて行かれる。マートルは「灰の谷」で自動車修理工場を営んでいる Wilson とみすぼらしい暮らしをしているが、トムに買ってもらったニューヨークのアパートに着くとその態度は一変し、尊大になる。そして自分もその一員である下層階級の人間の役立たずぶりに不平をこぼす。

‘You McKees have something to drink,’ [Tom] said. ‘Get some more ice and mineral water, Myrtle, before everybody goes to sleep.’

‘I told that boy about the ice.’ Myrtle raised her eyebrows in despair at *the shiftlessness of the lower orders*. ‘These people! You have to keep after them all the time.’

She looked at me and laughed pointlessly. Then she flounced over to the dog, kissed it with ecstasy, and swept into the kitchen, *implying that a dozen chefs awaited her orders there*. (34; イタリックは筆者)

マートルはまるで自分が上流階級の人間になったかのごとく、下層の人間を見下している。こうした上下関係をニックの視線は鋭く炙りだして、このパーティに呼びつけられたマッキー夫妻のマートルやトムに対する媚びへつらった様子や、マートルやトムの傍若無人な態度が見事に風刺されている。ここでは彼らの間の上下関係はさながら支配する者と支配される者との関係になっている。たとえば、マッキーはうだつのあがらぬ、力量のない写真家だが、なんとかトムに取り入ってロングアイランドの金持ち連中の中でいい仕事にありつけないかと考えている。そこで、ご機嫌とりのため、マートルをモデルに写真の構図を考えるような仕草を見せる。ところがトムはその脇であくびをして、マッキーのことなどはなから相手にせず、仕事の紹介を求める彼の申し出にも取り合わない。結局マッキーはトムにいいようにあしらわれて、最後には泥酔してしまう。

こうした支配・被支配の関係はトムとマッキーやウィルソンの間にはもちろんのこと、トムとニックの間にも微妙な形で存在しているとみてよい。そもそもニックはマートルのアパートまでむりやりつきあわされたのであり、しかも近くのドラッグストアに煙草を買いに出ているニックが帰ってきてみると、トムとマートルは別の部屋で情事にふけているのである。このパーティではニックもまた泥酔してしまうのだが、それはトムの尊大で傍若無人な態度に、この力関係の構図を敏感に嗅ぎとっていたからであろう。酔いから醒めたあと、ニックは眠りこけているマッキーの顔についていた石鹼の泡を拭き取ってやる(38)。彼はこの石鹼の泡がずっと気にかかっていたのだが、それはトムに呼び出されて、あわてて髭を剃って駆けつけたにちがいないマッキーの姿に、おそらくは自分の姿がダブっているのを心の奥底で感じとっていたからではないかと思える。

ニックはトムに関して、その有無を言わさぬ強引な横柄さと、肉体的なたくましさを強

調している。たとえば、その口元は“rather hard”であり、態度は“supercillious”で、目は“arrogant”。そして、大学時代フットボールの花形選手だったせいか、いつも“the appearance of always leaning aggressively forward”がうかがえる。“powerful”な“cruel body”と相俟って、その声には“paternal contempt”の気味があるといった具合だ(12)。さらに、トムのニックに対するふるまいの端々に、力づくで人を動かそうとするところが顔を覗かせている。ひとつだけ例をあげておく。

Before I could reply that [Gatsby] was my neighbour dinner was announced; wedging his terse arm *imperatively* under mine, Tom Buchanan compelled me from the room *as though he were moving a checker to another square*. (16; イタリックは筆者)

何事も自分の思いのままに操ろうとするトムのこの「力」はもちろん肉体的、性格的なものである。だが同時に、ニックの階級意識のプリズムを通して見ると、上流階級の支配力を表していると読み換えることができるだろう。

II. 「富」と「富」の表象

トムのこの「力」の基盤となっているのは「富」である。「富」こそが力であり、したがって金持ちが「支配」階級となるのだということを冷厳な現実としてわかっているのはトムである。このことを暗示する印象的な場面がある。それは一見何気ないエピソードに見えるが、「富」の力に関してある本質的な事柄を示唆するものとして、いささか強引に読み換えることができるように思える。トムとニックといっしょにアパートに向かう途中、マートルは通りで犬を売っているのをタクシーの窓越しに見かけると、アパートに置いておくのに一匹欲しいと言いだす。そして毛並みのふわふわしたのを犬売りの老人から受け取る。

‘Is it a boy or a girl?’ she asked delicately.

‘That dog? That dog’s a boy.’

‘It’s a bitch,’ said Tom decisively. ‘Here’s your money. Go and buy ten more dogs with it.’(30)

言葉使いに注目すると、マートルの上品さを気取った言い廻しに対して、トムはユーフィズムにはまったくおかまいなしに、‘a bitch’と露骨な言葉を使っている。そして老人に代金の10ドルを渡すと、これでもう10匹犬を買ったらよかろうと、横柄な口調で言っている。

ここに示されているのは、金持ち階級と下層階級の人間の「富」に対する考え方の相違であるように思える。マートルは、「幽霊のように」(28)影の薄い存在であるウィルソンと「灰の谷」に住んでいるが、そこに埋もれてしまうことに我慢がならない強い「活力(vitality)」(28)をもった人間として描かれている。いつまでも生き続けられるわけではないとい

う焦りにも似た気持ちを抱いており、強い上昇志向をもった人間である。そうしたマートルのような人間は「富」をありのままに見ることができずに、往々にして美化したり神話化したりして虚像を造りあげてしまう。「富」と「富」の表象一つまり、文字通りお金から、高価な品物、高級車や豪華な家具、大邸宅、それから裕福な階級に特有の暮らしぶり、言葉使い、慣習等々、「富」を表すもの一とを混同してしまう。金持ち階級にあこがれるマートルは、社交界のゴシップ誌を買い、自分にふさわしい新車のタクシーが来るまで何台かやりすごし、アパートに置いておくのに犬を買い、⁴ といった具合で、「富」の表象に幻惑されているように思える。

マートルのこうした傾向はトムの尊大な態度によってくつきりと浮き彫りになっている。彼女が上品な言葉使いが上流階級にふさわしいと思って気取ってみせるのに対して、「富」の力を知悉しているトムはユーフィズムなどに頼る必要はない。金持ち階級はみずからの世界を「富」の表象で埋めつくしてはいても、表象はあくまでも表象であって、それに惑わされることはない。そのことがこの場面には表されているのではないだろうか。「富」のむきだしの力、その支配力、権力性といったものが、トムの露骨な言葉にあらわになっているように思える。

このことはトムという人物の性格造型とは別次元の問題として、一般論として成立するというのが、フィッツジェラルドの理解であったように思える。つまり、金持ち階級の人間は「富」に対してリアリストであるのに対して、そうでない者は「富」に対してロマンティストあるいはアイディアリストになりがちだというふうにフィッツジェラルドは考えていたとみてよい。“The Rich Boy”の冒頭部でフィッツジェラルドは金持ち階級について、“Let me tell you about the very rich. They are different from you and me.”⁵と述べている。この言葉に対して、“Yes, they have more money.”⁶という Hemingway のコメントがあるのは周知の通りである。*This Side of Paradise* で一躍時代の寵児となったフィッツジェラルドと Zelda の華麗で放埒な暮らしぶりは伝説的になっているが、フィッツジェラルドの言葉は、ヘミングウェイのように金持ち階級をクールに一蹴してしまうことができず、「富」に対して彼自身ロマンティックになる傾向があったことを如実に示しているのではなからうか。少なくとも、「富」に対して、その権力性への認識を伴うリアスティックな見方と、その表象を美化ないし神話化するロマンティックな見方とがあるということをフィッツジェラルドは認識しており、そのことがニックの階級意識のプリズムを通して浮かび上がってきているように思える。

III. ニックのギャツビー像

ニックにとってギャツビーは「ここから唾棄すべきものすべてを表している」(8)のような存在でありながら、最後には「まわりのろくでもない連中全部を合わせただけの値打ちがある」(146)人間に思えるようになっていた。もしニックの階級意識が「富」に対する態度における階級間の違いを敏感に嗅ぎつけていたとすれば、侮蔑と共感の混ざりあった彼のギャツビー像にもそれは影を落としているはずである。それはどのような形をとっているだろうか。

ギャツビー邸の伝統のなさにニックが皮肉な目を向けていることにはすでに触れたが、

ギャツビーの世界を埋めつくした「富」の表象のけばけばしい俗悪さはニックの冷笑の対象となっている。ギャツビーのぴかぴかの巨大な車も、ゴシック調の重々しい書齋も、「遊園地の行動原理」(43)が支配しているような、贅を尽くした放埒なパーティも、そこに集い戯れる「蛾のような」(41)人々も、それに例の彼のピンクのシャツも、ニックの価値観と美意識から逸脱するものばかりである。ギャツビー本人についても、初対面の際のその形式張った言葉使いはほとんど馬鹿げているように思われたし(49)、ずっと昔のある悲しい出来事を忘れるためにヨーロッパを旅して歩いたという安っぽい身の上話を聞いたときには、笑いだしそうになるのをこらえるのがやっとだった(64)。ニックはトムの金持ち階級としての横暴さと腐敗にひそかな反発を覚えているとみてよいが、ギャツビーに対しても、上流気取りのマートルに一脈通じるその成り上がりの物質主義に侮蔑感を抱いている。

しかしその一方で、ニックはギャツビーのロマンティズムに心ひかれてもいる。ギャツビーが宏壮な邸宅を買い、パーティを開き続けたのが、デージーとの再会のチャンスを求めたためだということを知るにおよんで、ニックはギャツビーが「目的のない華麗さの子宮から」(76)生まれて息づき始めるのを感じる。そしてデージーとの再会の場を提供してほしいというギャツビーの依頼にも応じる。再会した際にギャツビーは色とりどりのシャツを何枚も彼女の眼前に放り投げ、デージーは感動のあまり泣きだすのだが、このきらびやかな「富」の表象としてのシャツの山、そこに顔を埋めて泣くデージーというメロドラマ的情景を前にしながら、ニックはいつもの彼に似合わずにひとつコメントをさしはさんでいない。この沈黙は、デージーだけではなくニックもそこにギャツビーのロマンティズムの純粋な美しさを感じていたことの表れといえよう。過去を取り戻すことができると信じ、現実のデージーをはるかに超えて飛翔する「ギャツビーの夢の巨大な活力」(92)に、ニックは深い感銘を受けるのである。

ギャツビーに対するニックのこうした二重のヴィジョンは、一面で彼の中流階級のバックグラウンドに根ざしてもいる。ニックは自己診断によると判断を留保する傾向があるのだが(7)、これは他人の思惑を過度に気にし、衝突を避けることで自分を守ろうとする中流階級的な特性のあらわれであろう。また家柄へのこだわりにも、こだわりがないかのごとく装っているように見えるがゆえにいつそう、階級上の不安定な立場を名家意識によって補償しようとする心理が作用しているという印象を受ける。こうした階級意識に依拠して、ニックはトムの言動に上流階級のむきだしの支配力を感じとり、それに反発を覚える一方で、下層階級から成り上がり、巨万の富を得たギャツビーの成金趣味にも侮蔑感を抱くのであり、また同時にアメリカの夢を具現したギャツビーの夢の巨大さにあこがれを感じるのである。

しかしそれにしても、なぜニックはあれほどギャツビーの夢に共鳴するのだろうか。ギャツビーがデージーにふさわしい存在となるために「富」を欲し、手に入れたその強靱な意志とエネルギーや、5年間もその目的のために幻を育み続けたロマンティズムの大きさに、シニカルな自分がとうに失ってしまったある種の無垢を見だし、感銘を受けたこともひとつの理由ではあろう。証券マンとして仕事に精を出している彼に、ギャツビーの物質的成功がみずからの成功の夢のロマンティックな対象となっていた可能性も否定できないであろう。しかしそうした理由だけでは説明がつかないほど、ニックのギャツビーへの思い入れは過剰であるようにみえる。ニックは、ギャツビーが「自分自身についてのプ

ラトンの観念から生まれた神の子」であり、「父なる神の御業」、すなわち“the service of a vast, vulgar, and meretricious beauty”(95)に従事しているのだと大仰に述べる。さらに、いわゆる「受肉」の場面の暗喩とレトリックに満ちた言葉の数々はどうかだろう。

Out of the corner of his eye Gatsby saw that the blocks of the sidewalks really formed a ladder and mounted to a secret place above the trees—he could climb to it, if he climbed alone, and once there he could suck on the pap of life, gulp down the incomparable milk of wonder.

His heart beat faster as Daisy’s white face came up to his own. He knew that when he kissed this girl, and forever wed his unutterable visions to her perishable breath, his mind would never romp again like the mind of God. So he waited, listening for a moment longer to the tuning-fork that had been struck upon a star. Then he kissed her. At this lips’ touch she blossomed for him like a flower and the incarnation was complete. (106-7)

この一節に顕著なレトリカルな言語はギャツビーの夢の内実を明確に解きあかしてはいない。木々の上の方のひそかな場所とはなにか。比類のない驚異のミルクとはなにか。星に打ちつけられた音叉の響きとはなにか。詩的言語が明確な指示対象をもつ必要がないことを割り引いても、その意味するところは必ずしも分明ではない。好意的に見れば、言語自体がギャツビーの夢、そのロマンティズムそのもののいわば客観的相関物たらんとしているといえようが、それにしてもここにあらわになっているのは、ニックのギャツビーへの思い入れの深さ、そしてそれがなぜなのかについての十全な理解を拒むある種の不透明さである。

その不透明さはひとつには、ギャツビーとデイジーの心理的關係が十分に描き出されていないという小説作法上の欠陥に由来するであろう。⁷ また、ギャツビーの富がどうやらかがわしい手段によって蓄積されたものであることへのニックの道徳的無関心⁸も、彼の感情移入をわかりにくくしている一因であろう。しかし、むしろそれ以上に、それはレトリカルな言語の使用がまさにギャツビーを神秘化することこそを目的としていたからではないだろうか。それではなぜ神秘化せねばならぬのか、その理由をニック自身が認識していたかどうかは定かではない。ただ、神秘化は必然的に明晰な洞察を遠ざけるものであり、ニックはギャツビーへの過剰な思い入れをレトリカルに表現することによって、はからずもなにかを隠蔽してしまったのである。

IV. アメリカの夢の逆説

ニックはなにを隠蔽したのであろうか。

ギャツビーは自分の世界を「富」の表象で満たしていく。この限りにおいては金持ち階級のなかに組み込まれてはいるが、いかに巨万の富を蓄えても、トムのような上流階級の人間からみずからの一員として認知されはしない。マートルと同じく、ギャツビーも「富」に対してロマンティックな見方をしており、その点でトムたちとは相容れない存在なので

ある。ギャツビーの世界にあっては、物質的なものが観念的なものと融合しており、彼の世界を彩るさまざまな「富」の表象としての事物は、その事物性・物質性においてありのままに捉えられるのではなく、彼自身の超越的ヴィジョンの表象となっている。彼の夢は生身のデージーを超えてはるか彼方へと飛翔する性質のものであったし、そもそも、ギャツビーという存在自体がプラトニックな観念から生まれたフィクショナルなものであった。要するに、ギャツビーの「富」は「ギャツビー」というひとつのロマンティックな観念に刺し貫かれているのである。トムはギャツビーの車を「サーカスワゴン」(115)と評し、その「動物園」(104)のようなパーティをせせら笑い、ピンクのシャツを着ている奴がオックスフォード出であるはずがない(116)、といった具合に、表面的成金趣味の次元でギャツビーを異物視する。しかしそれ以上に、ギャツビーの世界における「富」のあり方が本質的にトムの世界とは異なっているのだといえよう。

しかしアメリカの夢という神話はこうした差異を含めて、あらゆる階級性を覆い隠すように作用しているように思える。アメリカではだれもが自分の才覚と努力によって社会の梯子を登りつめて、成功を勝ち得ることができるというこの神話は、そもそも社会の階級構造を前提としていなければならない。すべてが平等な社会においてそのような考え方が成立するはずはない。なるほどヨーロッパの旧世界に比して、アメリカの新世界は社会の流動性が高く、少数の選ばれた勝者はアメリカの夢を実現し得たであろう。それがこの神話の正当性を高めたであろう。しかし、およそ神話というものが、歴史的に勝者の自己正当化のための虚構として成立してきたとするならば、アメリカの夢という神話の暗部には「灰の谷」のウィルソンのような敗者の屍が累々と横たわっているはずである。だが、この神話の内部に取り込まれてしまった眼にはその光景は見えない。そこでは成功というものが、個人の才覚や努力、強靱な意志や幸運などに還元されて、階級にもとづいた権力関係の存在が個人の次元にすりかえられ、隠蔽されてしまう。厳然たる階級の存在を前提としているはずなのに、あたかもそれが存在しないかのような幻想を、この神話は生み出すのである。そしてこの幻想をふりまくことによって、アメリカの夢は階級間の差異を維持し、強化する装置として機能する。ほかならぬアメリカの夢が階級の支配力の逆説的な発現となっているのだ。

ギャツビーと同じく、無名のとるにたりぬ者 (nobody) から成功して、「富」を獲得する、“Winter Dreams”の主人公 Dexter Green は、自分の子供には根っからの伝統ある上流階級の人間になって欲しいと考える。彼は「富」を蓄え、上流階級にふさわしい服装や態度を身につけるのだが、それは意識したものであって、そこには無造作なところが欠けている。そうした立居振舞の無造作さは努力によって達成できるものではなく、子供たちを待つしかないと考えるのである。つまり、ここでは上流階級の価値基準が理想として維持され、強化されている。こうした形で、アメリカの夢はギャツビーやデクスターのような者たちを魅了し、彼らに生きてゆく活力を与えると同時に、上流階級の存在そのものを正当化し、強化していくのである。

ニックは過剰なレトリックによってギャツビーの夢を称揚するのだが、そのことによってはずも隠蔽してしまったのは、こうしたアメリカの夢の逆説的な構造であった。ニックがこの構造を明確に認識していたとはいえないであろう。むしろ彼が過剰なレトリックによってギャツビーの夢を賛美すればするほど、その構造はその内側にいる彼自身にも

見えなくなる仕組みになっていた。階級間の差異、その支配力に敏感であったニックは、おそらくはそれゆえにこそそれを打ち消す力としてのアメリカの夢、そしてその具現としてのギャツビーの夢に魅了されたのであろう。しかし、一方ではギャツビーを賛美するレトリックの裏側で、ニック自身にも見えないところで、階級間の差異もその支配力もまた強化されていったのである。この点ではニックの華麗なレトリックは彼を盲目にしてしまったと言わざるを得ないであろう。ニックの階級意識という小論のモチーフに引き寄せて言えば、彼の階級意識の敏感さが、ギャツビーの夢の巨大さを引き寄せる一方で、逆にその奥にある階級性への認識を妨げたのである。洞察それ自体が盲点となる。それは皮肉なニックにいかにもふさわしいまなざしの皮肉な限界であった。

(付記) 本稿は1991年度九州アメリカ文学会9月例会(於九州大学言語文化部)において発表した原稿を加筆修正したものである。

注

1. ニックを語り手に設定することによって、ギャツビーの物語に深さと広がりを与えられたと考え、彼の語りをそのまま受け入れる立場から、ニックの視点には限界があり、語り手として信頼できないと主張する立場までである。後者の立場に立つものとして、近年では次のような論文がある。Scott Donaldson, "The Trouble with Nick," *Critical Essays on Fitzgerald's The Great Gatsby*, ed. Scott Donaldson (Boston: G.K. Hall & Co., 1984), 131-139. 平石貴樹、「「かれらは不注意な人たちだった」—『偉大なギャツビー』再考(上)、(下)」『英語青年』第143巻第1号(1997)、14-16; 第2号(1997)、11-13.
2. F. Scott Fitzgerald, *The Great Gatsby* (1925; Penguin Books, 1986). テキストからの引用はすべてこの版により、頁数は本文中に記す。
3. 原文は次のようになっている。"The one on my right was a colossal affair by any standard—it was a factual imitation of some Hôtel de Ville in Normandy, with a tower on one side, spanking new under a thin beard of raw ivy,..."
4. マートルのアパートには大きすぎるつづれ織り張りの家具一式が置いてあるが、この犬にしても生き物として愛玩するためというよりも、金持ちとはこういうものだという彼女のイメージに合わせるための調度品の一種なのである。
5. Fitzgerald, "The Rich Boy," in *Babylon Revisited and Other Stories* (New York: Collier Books, 1960), p.152.
6. Ernest Hemingway, "The Snows of Kilimanjaro," in *The Complete Short Stories of Ernest Hemingway* (The Finca Vigía Edition; New York: Charles Scribner's Sons, 1987), p.53.
7. Ron Neuhaus, "Gatsby and the Failure of the Omniscient 'I,'" in *Modern Critical Interpretations of The Great Gatsby*, ed. Harold Bloom (New York: Chelsea House, 1986), p.52. 平石、前掲論文、(下)、11頁。平石論文はこのほかにも作品内の出来事のクロノロジーの矛盾やニックの語りの混乱を指摘し、整合性をもった解釈は不可能では

ないかという見解を表明している。

8. たとえばドナルドソンはニックの行動を規定しているのは道德ではなく礼儀作法だとみなしている。Donaldson, p. 131.